

政治研究結果報告書

—政治研究助成—

西暦 2026 年（令和 8 年）2 月 25 日

一般財団法人 櫻田 會
理事長 増田 勝彦 殿

研究者名 石川 徳幸

大学名・職位 日本大学法学部・教授

第 43 回（令和 6 年度）櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。

※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称（英語も記入） Research Theme

五百木良三の政治活動と言論に関する一考察
A Study of IOKI Ryozo's Political Activities and Opinion

※英文抄録（研究目的、経過、成果 250words 以内） Abstract (Purpose, Process, Significance)

This study aims to elucidate a facet of nationalist thought and political practice in prewar Japan, focusing on Ioki Ryozo—who was active from the Meiji era through the early Showa era—as a case study.

Ioki was a prominent figure who spearheaded political movements from a “right-wing” perspective. Through these activities, he published numerous pamphlets and magazines. By analyzing Ioki’s political trajectory, this research examines the logic of the “right-wing” factions that facilitated the spread of ultranationalist ideology throughout prewar Japanese society.

Today, eighty years after the end of World War II, it is crucial to re-examine prewar “right-wing” discourse. This study seeks to contribute not only to the field of political history but also to journalism and media history.

※研究の目的・研究方法・意義（日本文 600 字以内）

本研究は、明治から昭和初期にかけて活躍した五百木良三をケーススタディとして、戦前日本における国粹主義者の思想と政治的実践の一端を明らかにしようとするものである。五百木良三は、日露講和条約反対運動、日韓併合運動、満蒙独立運動、ロンドン軍縮条約反対運動、国体明徴運動などを牽引し、所謂「右翼」の立場から政府を鞭撻する政治運動を展開した人物であ

る。五百木は、それらの活動の中でパンフレットや雑誌の刊行を行なった。これらの五百木の活動を通じて、戦前日本の社会に超国家主義の思潮を瀰漫させた「右翼」側の論理を考察する。

研究方法は、史料実証主義に基づいた歴史学的アプローチを採用し、当時の政治・社会的なコンテクストの中で、どのような意味を持っていたのかを解明する。

五百木の政治運動に関しては、現代の私たちから見れば日本の軍国主義を加速させた超国家主義的活動として反省すべき過去を含むものである。終戦から 80 年経つ今日において、戦前の「右翼」的言説を先入観なしに分析し直すことは、日本の近代史を多角的に捉える作業として、今後さらに求められるだろう。この意味において、本研究は政治史のみならずジャーナリズム史／メディア史など隣接する日本の近代史研究の領域に重要な意味を持つと考えている。

※研究経過と結果の概要 (以下の欄に 35 行以内(1500 字程度)にまとめる)

これまでに、五百木良三に関する研究が少なかった理由の一つに、史料の不足があげられる。五百木は日比谷焼打事件で逮捕された経験から、警察の取り調べによって周囲を巻き込まないようにするため、意図的に日記など証拠になり得るものを残さないようにしていた(例外として、句作をまとめた『飄亭句日記』がある)。五百木良三に関する唯一の本格的な評伝である松本健一著『昭和史を陰で動かした男: 忘れられたアジテーター・五百木飄亭』(新潮社、2012 年)が、表題に反して明治期の活動を中心に論じているのも、こうした事情によるものであろう。また、五百木の後嗣は太平洋戦争中に戦死しており、親族をあてに遺物を追うことができない。そのため、本研究を進める手段としては、五百木が新聞や雑誌に投じた文章や講演の記録を拾い集めることと、迂遠な作業ではあるが、五百木と関係があった周辺人物に関する史料によって傍証をかためていく他はない。まずは上述の史料蒐集と関係する文献の渉猟につとめ、五百木良三の業績を整理して先行研究の間隙を埋めることが本研究課題の里程碑となる。

医術開業試験の免状を取得していた五百木良三には、医事ジャーナリズムの専門誌『医海時報』に関与し、同仁会の理事を務めるといった医学界に関する経歴もあるが、ここでは割愛する。政治活動に関しては、以下のような経歴が挙げられる(拙稿や先行研究で明らかにされている日本新聞社編集長時代と政教社社長時代の活動を除く)。

- ・日露講和条約反対運動: 講和問題聯合会の一員として、日比谷公園の国民大会に関与。
- ・韓国併合問題: 大竹貫一・小川平吉・柴四朗らとともに日韓同志会を組織し、「日韓同邦」を主張。
- ・満蒙独立運動: 川島浪速らとともに満蒙独立運動に関与し、対支聯合会を組織。第2次大隈政権下に「密使」として満州に渡る。
- ・城南荘／国民義会: 「綱紀肅正問題」などをめぐり警察官僚の正力松太郎と対立。中国問題に関して国民義会を興し、大隈内閣の外交政策を支持する運動を展開。
- ・尼港事件への対応: 対露同盟会のメンバーとして内閣弾劾運動に関与。尼港事件に関して純労倶楽部から「尼港問題を通して: 所謂時代精神の暴露」と題したパンフレットを刊行。
- ・普選期成同盟会: 普選問題が本格的に政治問題化する前の 1919 年に、普選期成同盟会を組織し、労働者の赤化傾向を憂えて純労会(純労倶楽部)を結成。
- ・宮中重大事件: 内定していた東宮妃候補を、色盲遺伝の懸念を理由に山縣有朋が破約させたという問題に対し、山縣を追及する運動を展開。
- ・青天会との関係: 青天会は 1924 年に立憲政友会の小川平吉を中心に結成された、反社会主

義・反共産主義・反自由主義を謳った団体であり、翌年に小川平吉は機関紙として『日本新聞』を発刊した。小川は当初、五百木を日本新聞社の社長に就かせようとしていた。結果として、五百木の社長就任は成らなかったが賛助者として名を連ねている。

これらの活動において、五百木が主張した論理を史料の分析を通じて解明するとともに、各歴史的事象において果たした役割を考察した。得られた知見は、順次、学術論文として公表していく計画である。

※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等（あるいは発表の計画や形式等）

本研究課題に係る五百木良三の政治活動および言論活動については、拙著『言論と政治の関係を考える：日本政治とジャーナリズムの近代史』（日本経済評論社、2026年9月刊行）でも触れたが、本研究助成による本格的な成果としては、まず『政経研究』第63巻第4号（日本大学法学会、2026年度刊行予定）に学術論文として公表する予定である。長期的には、今回の研究を発展させ、五百木良三に関する単著の刊行を目指したい。

【注】 文責は貴研究グループに負っていただきます。個人情報等には十分ご注意ください。